

自殺は論外だが、死が人の宿命である以上、お年寄りが亡くなるのは自然でもある。病院で

体にいろんな器具を付けられ、

昏睡状態を長い間続けた大好き

なおばが亡くなったとき、「お

ばちゃん、やっと楽になれた

ね」。遺体にそう声を掛けた。

そのときの思いを呼び起こす

本に出合った。「いのちつぐ『み



とりびと』(國森康弘さん著、

農山漁村文化協会刊、全4巻)。

在宅で亡くなるお年寄りと、そ

れを看取った家族らの姿を切り

取った写真絵本である。

死ねば人は冷たくなるが、こ

の本に漂う空気は温かく、円い。

それは古木が朽ちるような自然な死だからか。あるがままを受け入れ、最期まで関わられた周囲の涙の温かさ故か。

第1巻で大ばあちゃんの死を

看取った小学生の恋ちゃんと言

う。「人は死んだら冷たくなっ

て二度と生き返りません。でも、

私の心の中で生き続けていま

す」。ご一読を。(佐藤弘)